
壊れかけの世界

けんちょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れかけの世界

【Zコード】

Z2718BA

【作者名】

けんちょ

【あらすじ】

10代の学生達が
生と死の極限サバイバル？

仲間を見捨てるか？助けるか？
他人を信用できるか？裏切るか？

学生達は決断を迫られる。

第0話 プロローグ

何気ない日々は一瞬にして消え去る
平和な毎日が、楽しい毎日が、何もかも

全ては一瞬

そんな極限状態のなかで
人はどれだけ助け合えるか
どれだけ他人を思う事ができるのか

人の本性が現れる?

全ては前触れなく起こる

あなたは極限状態に陥った時
他人を思う事ができますか?

この地獄に立ち向かうのは

10代の学生達

果たして彼らは生き残る事ができるのか?
それとも全滅か、待ち受けるのは
楽園か地獄か

あなたはどうちに賭けますか?

死と隣合わせのサバイバルが今始まる?

第1話 悪夢の始まり

この物語は

生と死の10日間の

学生達による戦いの記録である…

20XX年10月6日 AM7:30 自宅

俺の朝は寝坊から始まる

今日もいつもと変わらない、目覚まし時計のアラーム音が聞こえ
重たい体を起こしながら、学校に行く準備をする。
おっと自己紹介が遅れました。

俺の名前は海棠恭一、どこにでもいる普通の高校生

そして今、遅刻寸前の大ピンチ？

これで14回目だ、また内申点下がったな。

そう思いながら、学校へといつもの道を通りしていく
そして俺は校門前に来た時、異常に気がついてしまった
それは…

校門前に不審者がいる、だがソイツは何か変だ
なぜなら、臓器が体からはみ出していたからだ

ソイツは校門を叩いてる、異常に気がついたのは俺だけじゃなかった
生徒達や教師も気がついた

今思えば、この時逃げていればよかつたが、もう遅い

教師どもが不審者を捕まえに来た

その内一人が不審者を取り押さえようとしたその時ソイツの首は回転し、教師の腕に喰らい付いた？

ソイツは、そうゾンビだ。

映画通り噛まれた奴もゾンビになるだろ？
そう考へてる内に、噛まれた教師が起き上がり側にいた、別の教師に喰らい付いた

俺は裏口から学校の中へと急いだ
もう学校中パニック状態になつていたが、人ごみをかき分け
やつとクラスについた。そこには3人のゾンビと2人の生きている
“人間”がいた

第2話 2時間前まで…

10月6日 AM9:30 クラス2-4

俺のクラスは、奴らで溢れてる
なんてこつた、まだガールフレンドの高木あおいと親友の槙村雄吾
がいるのに

俺は躊躇いなく机をもち、奴らを倒していった
その中で生存者を2人発見し、必死で助け屋上に逃げた。
落ち着いて2人を見ると、ガールフレンドと親友で
二人とも無事だつた、俺は喜ぼうとしたが
目に入った光景をみて絶句した。

おれが見たのは、炎に包まれる街
絶える事の無い悲鳴、グラウンドの生徒はどんどんゾンビの仲間に
なる

こんな光景は見たくなかった、見るぐらいなら
クラスにいた方がまだマシだ

その時、突然開いたドアをみてまた絶句した。
それはゾンビの大群だ、奴等が来た。

生きた肉を求めて…

もう逃げるしかない、その時槙村が襲われ
「助けてええ～？痛い～」と叫んでいた
俺と高木は槙村を置いて逃げるしかなかつた

そして管理室に入り、ガチャンと鍵をかけ

槙村を殺したも同然の事をした、アイツの悲鳴がまだ聞こえる、そ

してついに途絶えた

この時俺たちは初めて人を殺した

なんてこつた2時間前まではいつもと変わらなかつたのに：

第3話 悲鳴

10月6日 AM9:41 校舎屋上

運良く、屋上の管理室（実は違つて、ここから階段で降りたトコが管理室）にたどり着いたが問題はここからどうするかだ。

扉を開ければ、奴等に喰われる。かと言つて逃げなきや餓死し、まあ単純な話

このままじゃ三途の川を渡る羽田になるだらう生きるには、ただ一つ管理室に降り

脱出の経路を確認し、学校を脱出する。

そのためには武器が必要だ、俺は高木に相談した

「高木？どうするこれから？俺は管理室に降りて脱出の手段を確認するけど、くる？」

これ聞いた高木は

「行く？でも武器が無いよ」

と、やる気は十分だつた。

さあ、人はいる、後は武器だ。何かねえかな？

そう思い武器を探してると、俺は啞然とした。

なぜなら、よくドラマで出てくる警察の5発装填の正式銃を見つけたからだ

たしか管理室のおっさん警察だつたらしにし、何も不思議では無かつた

高木に報告しようとしたその時…

高木が悲鳴をあげた？俺もその視線の先のドアを見る

そこには、信じられない物が……

第4話 罪悪感

10月6日 AM9:46 管理室の一階

悲鳴をあげた高木の視線の先には、ゾンビがいた
しかし、ただのゾンビでは無かった。
そのゾンビは……

わざと殺された、槙村だった。

俺は信じられなかつた、これは夢だと思つたかつた
だが、今はそんな思いに浸つてゐる時ではない、今すぐ逃げなきゃ
手遅れになる

しかし、逃げれそうに無い

なぜなら高木は腰を抜かし動けない状態だつたからだ

俺はバリケードを築き、何とか食い止めた。

でも、ゾンビが来るのは時間の問題だ、バリケードに使つたのは、
木製の本棚

もう槙村のかおが見えるまで破壊されてゐる
ここまで来たらもつて10分ぐらいだ

やるしかない、俺は銃口をアイツの顔に向けた？
その時、高木が

「やめてっ！撃たないで？雄吾はゾンビになつたりなんかしない？」

と言つた。実は高木は槙村の事が好きだつたのだ。

これを聞いた俺は

「俺だつて、嘘だつて信じたい。でも本当の事なんだつ？」
そう言つて引き金を引いた

後に残つたのは、奴の死体と響き渡る銃声だけだった
こんな時、雨でも降つてくれたら気が楽なのに
そう思いながら、俺と高木は管理室に向かつた

第5話 残酷な現状

10月6日 AM10:07 管理室

槙村を本当の意味での世に送ったあと、俺らは管理室へと向った
管理室への道に奴等はいなく、すんなりと目的の場所に着くことが
できただが

悲劇には高木が気づいた。

ウチの学校は私立で金持ちとかが多いため、10mごとに熱感知セ
ンサーがついている。

その様子を管理室のモニターで見たが、あまりに残酷だった
それは校舎内の熱源が徐々に少なくなっている、これは生きた人間
が減つて

奴等が増えた事を意味する。

隣にいた高木は思わず

「 ちょっと何これ！？ 热源が減つて いる！？ 」
と言つて いた。

それが普通の反応だ。普通は驚くのだが

俺は驚けない。なぜなら映画通りにいつて いるからだ

恐ろしいぐらい、映画通りに事が進んで いる。

俺らはこの恐怖と戦わなければ ならない

その時監視力カメラに何か動くこの世の物では無い“何か”がカメラ
を横切り

管理室からそう遠くない、3階の6・5番カメラの映像が途絶え
次々とカメラの映像が途絶え始めた

いつたい何がいるんだ！？

一瞬だけ俺はソイツを見てしまった。
あれは何だ！？これじゃ映画じゃないか？

第6話 巨大な爪痕

俺は見てしまった。カメラを壊している奴を。

何なんだあれは！？まるでゾンビ映画に出てくる、化け物じゃないか？

とりあえず、早く脱出しなきゃヤバい事になりそうだ。

まだ高木には教えない方がいいな、また動けなくなつたら、次は死ぬ。

銃の残弾は残り4発しかないから、無駄には出来ない。
相棒と武器は最悪の状態で、素早くかつ安全に脱出するにはどうしたらいいのか？

そう考えていたら、突然高木が

「ここは3階だから、近くの階段を降りて1階技術室まで行つて、
そこ非常用出口から出るのはどう？」

こう言つてきた。

勿論、いい案だが一つ問題がある。

それは化け物と同じ道を通らなければならぬ事だ
それに…

壁にある巨大な爪痕も気になつていた。

第7話 化け物の正体

俺らは1階の技術室に向かうべく、階段を降りている。
不思議な事にゾンビの姿は見当たらない。

その事に気づいた高木は

「ねえ恭一？ゾンビ達見当たらないね…」

と話しかけてきた。まだ槙村の事引きずつてゐるな。
だが俺にはわかつてゐた。奴の姿が、奴が近づいてゐる事が。

「どうしたの？顔色悪いよ…」

高木が心配している。そりや無理もない。
こんな状況で多分2人だけ校舎にいるなんて
すごく怖いだろう。俺だつて怖い。

あんなの見た後だしなあ

そう思いながら、1階に着いた。

この廊下の曲がり角を曲がれば、脱出でき…

その時高木が悲鳴をあげた？

何と曲がり角を曲がった先に奴がいた。そうカメラを壊した犯人だ。

一回見たが実際に見ると、吐き気がする

そいつは皮膚が無い。

筋肉丸出しで中山きんにくんバリのマツチヨだ
いつでもアメリカに行けるぞこりや～

そんな事考えてたら、高木が

「どうすんのよ…？恭一どうにかして？」

そう言われても…

マツチヨで、身長1.9m、手には大きな爪、ヤバい要素のフルコ

ースつてトコだな

何だあれ？腕に腕章が、何て書いてる？

“ I W a N ”

いわん？あいつの名前か？？

まあそんな事はどうでもいい、アイツをビリヤッて倒すか？

おつあそこに消火器が？

ダイードならあれを銃で撃つと爆発して…（笑）
よしこれで行こう

残弾は4発、確実にあてなきや死ぬ。

俺は消火器を掴み、イワンに向かつて
投げた

第8話 衝撃

10月6日 AM10:13

俺は消火器をイワンに向けたまゝ直ぐ投げた。

その消火器はイワンの足元にぶつかり、俺は消火器を撃つた。

消火器は爆発し、辺りには白い煙が充満していた。逃げるなら今しかない。俺は高木に

「今しかない？ 行くぞ？」と叫んだ

高木は

「化け物は確かめなくていいの？」と聞いてきたが、その必要は無かつた

あの爆発で死なない訳がない？

俺は近くの消火器を掴み、技術室のドアをぶつ壊して、中に入った。そのとたん、凄まじい咆哮がきこえた。

奴だ。

死ななかつたのか！？あの爆発で！？そんな事より逃げないと、この距離はマズイ！

教室の窓を割つた俺らは、急いでグラウンドに向かつて逃げたが外もゾンビでいっぱいだった。

その時、青空を黒い鉄の塊が横切つた。

あれは自衛隊のUH-60JA、ブラックホークだ！

ヘリのハッチが開き自衛官の一人がM2重機関銃をイワンに向けてぶつ放す。するとイワンは校舎の中に逃げたがまだ、ゾンビがいる。そうするとまた一人出てきて、叫んだ。

「私はこの部隊の隊長の榎だ？ 今から君たちを救助する？」

そう言つと、さつきの自衛官が重機関銃をぶつ放し、ゾンビ達を一

掃した。

そしてヘリはグラウンドに着陸し、榎と名乗る人物が出てきていきなり

「たまたま通り掛かつた時に君たちを見たんだ、危ない所だつたねとにかくに話す。さらに一言

「今から160km離れた、避難所に君たちを送つていいくよ。」と言つたので

俺と高木は揃つて

「ありがとうございました？」と心の底から感謝した。

「じゃあヘリに乗ろうか」

またにこやかに話す。（笑）

その時、また化け物が戻つてきて俺らじやなくて
ヘリを襲つた。榎さんは

「吉川あ～秋山あ～？」と叫んでいた

そして、彼は自分のバッグから手榴弾を取り出し。ヘリの中に投げた！？

やがて、爆発しヘリもろともイワーンを木つ端微塵にしてしまつた？

俺は

「どうしてヘリを破壊したんすか！？」と聞いた

すると榎さんは

「命令だ。もし奴らに襲われ助からない場合は、感染阻止のために適切な処置を行えと言われた」

感染！？じゃあ病気！？

榎さんはもう一言言つた。

「あれは極秘だが、新種のウイルスだ。感染すれば、まあ程度によるが生きていれば2時間で発症し、死んでいた場合は数秒で奴らになり、生きた人間を襲う」

俺の頭は混乱していた。

しかし、高木が

「助かる方法は無いんですか？」と聞くと

「ある。2時間以内に抗ウイルス剤“ドウルガー”を投与すれば助かるかゾンビにならずに死ぬ」

もう一言榎さんが言った

「それよりどこか安全な場所を見つけよう。そこの君、名前は？」

俺！？そう思つていると、高木に小突かれ

「海棠恭一です」と答える。

「恭一くん、銃は使えるか？」

「一応使えますけど…」

すると、榎さんは銃をとりだし

「これは9mm口径のハンドガンで、装弾数は9発だ。これを持つていろ。脱出時にゾンビに遭遇した場合のみ使え。それじゃあ行くぞ？」

こうして安全な場所を見つける事になった。

第8話 衝撃（後書き）

訂正です。

0、6、7、8携帯で一部表示されない部分を直しました。
あと、罪悪感を一部修正しストーリーが若干変わりました。

第9話 希望

10月6日 AM10:36 学校前国道

俺たちは学校前の国道を走っている。
まわりにゾンビの姿は見えるものの、襲つてはこない。
やはり映画通り、音に反応して行動しているのか。

俺は怖かつたゾンビ達が…

f
槙村も榊さんの仲間もクラスメイトも皆、俺の目の前でゾンビになり死んでいった。

俺もいつかゾンビになり、仲間に襲いかかつたりする事を思つと
急に恐怖の波に飲み込まれそうになる。
だから、怖い。

そんな事を考えている内に榊さんに

「おい? 恭一くん? しつかり見張つてないと、逃げられなくなるぞ
」

と、一喝されてしまった。

確かにその通りだ。やられてしまつたら、そこで全て終わりだ。

まさにGAME OVER、BAD END

この類いの言葉通りになつちまつ。俺はそんなの嫌だ?
だから、今は生き残るしかないんだ。

そのためには、まず160km離れた避難所に向かつ必要がある。

それも早い内に…

避難所が感染すれば、阻止する事はまず不可能だ。人が多すぎるので。

その時、神さんの無線に連絡が入った！？

「…」

なんかノイズが入つてて聞き取りにくいが、ヤバイのは間違いない。この状況をいち早く理解した神さんは

「感染のスピードは予想以上に早い。我々は目標を変え、どこか安全な場所を見つけ、立て籠もる？恭一くん、どこかいい所は無いかい？」

安全な場所！？そんなトコあんのかよ…

あるとしたら、近くの大型ショッピングモールだな。

「神さん、ショッピングモールはどうですか？あそこは今ドラマの撮影でテレビ局の人しか居ないはずです。」

それを見た高木は

「武器はどうあるの？そもそもちやんとした武器が必要じゃない！？」

確かに、今までちやんとした武器と言えば

学校で手に入れた銃と神さんのハンドガンぐらいだ。

学校で手に入れた銃はもう弾がほとんど無い。ハンドガンは9発とそのマガジンが2つ。

補充しないところよりもヤバい。

すると神さんが

「その点は心配ない？俺の持つてるGUNによると、近くに自衛隊の装甲車があるはず、任務の途中で放棄されたから、武器弾薬もまだあるはずだ」

「ならそこに行くなのはどうですか？」

思わず、テンションが上がる（笑）

すると神さんは

「そうする以外に道はあるか？」
と、クールに面白そつと言つてきた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2718ba/>

壊れかけの世界

2012年1月10日23時46分発行